

年（次章參看）の事にして、舊唐書の記事を以て正しとすべく、事終りて後二年なる貞觀二十一年に至りて、初めて賜宴の事ありしものとは思はれず、かゝれば助國討伐篇の記事は、全く舊唐書の記事と同じく、「貞觀二十年廻紇吐迷度遣使入貢、以破薛延陀功、賜宴內殿」と訂正せらるべきものなりとす、更に朝貢篇の記せる貞觀十二年八月の記事について考ふるに、此の年回鶻の使の入貢したることは、新舊唐書の本紀及び回鶻傳等一も之を載するなく、而して此等の書に見ゆる貞觀二十年八月回鶻以下の鐵勒十一部の入貢したる顯著なる事實につきては朝貢篇は却りて之を逸せり、依て思ふに、朝貢篇が菩薩と記せるものは、前に見たる所と同じく吐迷度の誤にして、而して又貞觀十二年八月とせるものは二十年八月の誤に外ならざる可く、從て此の記事は、貞觀二十年八月廻紇吐迷度、南過賀蘭山、臨黃河、遣使入貢」と訂正せらるべきものなるべし、果して然らば此等兩書の記事は、其の字句に於ても全く吻合するものにして、兩書が同一資料より之を抽出し、舊唐書が一續きに記したる所を、冊府元龜は朝貢篇と助國討伐篇とに分載したるものか、若しくは冊府元龜は舊唐書の記事を其の儘に取りて、之を兩篇に分出したるかに過ぎざるを認め得べし、されば要するに菩薩の在世は貞觀四年突厥の頡利可汗が唐に降伏したる時以後、何年に及びしかは之を知るに由無く、從て次の部酋吐迷度の立つに至りし年次も明かに知り得べからず、唯だ貞觀二十年（六四六年）に至りて、吐迷度の力によりて初めて薛延陀の勢力を摧き得たるものなること、次に述ぶるが如くなるを以て、菩薩の死が之より以前に在りしことは固とより疑無し。

第三章 吐迷度の時代